

論説

香港の盂蘭勝会の現状と餓鬼供養¹

荒見 泰史

はじめに

2016年8月12日より、歴史民俗博物館松尾恒一氏、香港文化博物館林錦源氏、京都大学上島亨氏と筆者の4人で、毎年香港で行われている盂蘭勝会の状況について調査を行った。

香港では様々な地域や社区で毎年旧暦七月に盂蘭勝会という儀礼をおこない、幽魂に衣や食を施し、かつ神仏の加護に感謝を示している。ただ、香港と一言と言っても、古くから時代ごとに移民が有り、中国王朝統治下における広東省および近郊を主とする地域からの移民の他、近代以降の度重なる動乱とともにやってくる広い地域からの移民など、文化的には重層的かつ複雑な様相を呈していることはよく知られている通りである。ために、かつて田仲一成氏が『中国祭祀演劇研究』²で多くの香港の儀礼の状況を報告する中で言及しているように、香港内でも伝承系統によって各地域で実施方法は異なることが多い。加えて、今日の現代化の流れの中で、香港でのそれぞれ儀礼も融合しつつ刻々と変化しているという複雑さがある。香港文化博物館監修「香港非物質文化遺産普查建議清單」（2014年）³では、これを「水上人伝統」（3か所）、「本地伝統」（37か所）、「海陸豊/鶴佬伝統」（13か所）と「潮州人伝統」（33か所）に分類しているが、この「清單」作成の担当者でもある林錦源氏自身が今回の調査中にもたびたび指摘されていたように、この分類作業には並々ならぬ判断上の難しさがあったことであろう。

筆者たちグループは、これまでに香港をフィールドとして調査を行った経験は浅いが、中国古代以来の避邪儀礼や施餓鬼儀礼の歴史の変遷という角度

から、東アジア各地での施餓鬼、水陸齋などの状況を調査してきた。今回もまた、同様の角度から、田仲一成氏等の調査以降、また 1997 年香港返還の変化も含めて、盂蘭盆、施餓鬼儀礼を調査するために今回の調査を行うことになった次第である。そのような経緯に拠ることから、重ねて言うように基礎的な調査とはなったが、松尾恒一氏や案内役を引き受けてくださった林錦源氏による民俗学的解説、上島享氏による歴史的、宗教学的読み解きとともに見聞した事柄には様々な研究角度から見て興味深い内容が多く含まれており、ここにそれらを整理しつつ筆者の研究角度から若干の資料を補足し、議論を深めていきたいと考えた次第である。

1. 盂蘭勝会とは

「盂蘭勝会」とは、その「盂蘭」の二字から見て盂蘭盆を起源とする会であることは直ちに理解されるであろう。「勝会」とは、「勝」の音が「盛」、義が「美」、「妙」に通じるため、「文昌勝会」のような廟会のほか、「購物勝会」などのような一般的な会においても美称として使用されることばである。つまり、「盂蘭勝会」とは「盂蘭盆会」を美化して言った名称ということになる。現在では香港を中心に、いわゆる「盂蘭盆会」、「盂蘭会」の美称として広く用いられている。

この名称は、古くは明代の寧波天童密雲円悟禅師（1566-1642 年）『密雲禅師語録』（巻四）にも見えているが⁴、上にも言うように単に美称としての意味もあり、また寧波付近で当時常用されていた形跡も見られないので、現在の香港の「盂蘭勝会」との継承関係は薄いものと見られる。香港一帯で現在のように使用されるようになるのはもう少し後代になってからだろうと思われる。

この名称ともなったもとの盂蘭盆とは、幽魂を祀る中国の民俗信仰と祖先祭祀を背景に、仏教的に言う死後の責め苦からの救済という追福の思想が加わってできた儀礼、習俗である⁵。具体的には、仏教僧の夏安吾の終わる七月十五日に僧侶を癒すために施食供養し、父母及び七世父母の供養を請ずれば、父母の寿命は延び七世父母は餓鬼の苦しみから逃れる功德があると説く。こうした考えは、最早期の資料とされる竺法護訳『般泥恒後灌臘経』、『仏説盂

盂蘭盆經』、『経律異相』等の検証によって、六朝梁の頃から仏教の儀礼として行われていたものと確認することができる。

一方で、仏教勢力の伸長とともに形作られた道教の中では、中国古来の思想から、遊魂の救済により災厄を除くことができるという儀礼へと発展させてきた。六朝宋の陸修静『太上洞玄靈宝授度儀』などでは黄籙齋のもととなる儀礼の書を撰述していることから、仏教の盂蘭盆とほぼ同時期にこれに類する中元節の原型を形作っていたこととなる。中元節とは、宇宙を主る天地水の三官のうちの地官を祀れば、孤魂、遊魂など多くの魂が救われると説くものである。

こうして発祥した両者は、おそらくは唐初の道教隆盛時代の中元節の流行を受けて孤魂、遊魂救済の考えとともに盂蘭盆と一体となり混在する形で行われるようになったものと思われる。両者が混在することに危惧した法琳（『弁正論』「道家節日」）の意見も見られている通りである。ほぼ同時代に仏教側で孤魂、遊魂救済の為に阿地瞿多『陀羅尼集経』『軍荼利金剛救病法壇』等のような修法が見られるようになり、少し後の仏教優勢時代になると実又難陀訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』によって、広く孤魂、遊魂を祀る儀礼として行われるようになったのはそうしたことを意識したものかもしれない。

とはいうものの、盂蘭盆、施餓鬼と中元節は、いずれもが魂を祀るという同じ中国の民俗信仰を土台として民心を集めるものだったため、唐初の頃には同じ七月十五日に行われる状況が有るなど（法琳『弁正論』）、早い時期から実質上は不可分の関係にあったに違いない。そしてとくに仏道が交互に繁栄しつつ共存した唐代には儀礼の部分での融合が進み、今日においては壇の形式や次第作法に共通性が見られるようになり、同じ儀礼を盂蘭盆と呼びまた中元とも呼び、盂蘭勝会と称しながらも道士が執り行い三官大帝を祀るなど、作法の細部に至る融合が見られているのである。日本の禅宗などで、盂蘭盆と称して施餓鬼を中心に儀礼が行われるのも、そうした唐代から宋代までの中国における融合を受けたものと筆者は考えている。今日の香港で行われる盂蘭勝会も同様で、ほぼ孤魂、遊魂を祀り救済することが主となっている。

ただ、改めてここで強調しておきたいのは、中国王朝の宗教政策上、仏教

と道教は制度の上では明確に分けられ、とくに唐代からは儒仏道の三教を認めて互いに競わせてきたという歴史的要因から、国家祭祀などとして行う場合には区分することを建前としていることである⁶。前にも言うような盂蘭盆と中元節の同時期の成立、後には仏教でも孤魂、遊魂祭祀を加えるようになったことなども、振り子のように支持教派を変える政治体制を背景に仏教と道教で交互に発展させてきたことによるとみることでもできる。仏教の盂蘭盆、中国伝統或いは道教の中元節という理解を残しつつ、広い社会層のとくに周縁部で実質上これらを混用しているのはこうした事情に拠るものであろう。以下にも紹介する香港の盂蘭勝会でも、融合して不可分になっている中でも、庶民層の人々においてさえ「仏教の盂蘭盆、道教の中元節」という意識を多くの人が持っていることは興味深いことである。

2. 香港の盂蘭勝会の特徴と「場地」

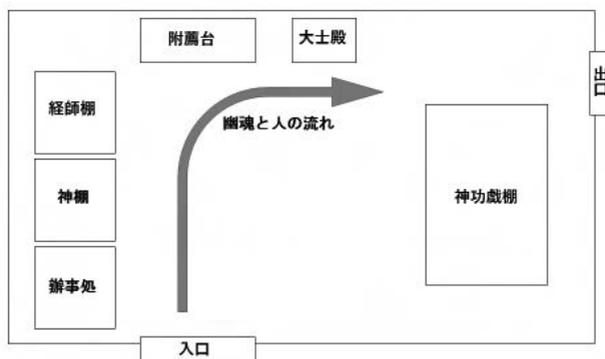
こうした中で、香港で行われている盂蘭勝会の特徴は、大きく言えば宗教活動に対する政治的制約、宗教的規範化が薄く、民俗の特徴が強く表れていたこと、言い換えれば仏道の混交が濃厚で、また土地の習俗が各処に見られることである。そして、近代以降の生活形態の変化、情報交通の発達に加えて、政治体制の変更と中国政府の干渉の波の中で、それらが急速に変化していると言える。

香港の都市部における盂蘭勝会の特徴としては、公共の公園などに場（場地という）を設け、竹を中心とした骨組みで「棚」をくみ上げ、華美に装飾して行うことである。その棚にはそれぞれ意味があり、例えば多く見られる潮州系の棚の典型的な例から見れば、「天地父母棚（神棚）」、「神袍棚」、「経師棚」、「大土棚」、「孤魂台（附薦台）」、「神功戲棚」、「米棚」、「弁事処」、「金榜」、「馬棚」の数種があり、各地域の場地の習慣によって設けられる棚や配置が若干異なるほか、近年の状況により若干変化をしているという。

以下に、具体的に行われている香港での盂蘭勝会の活動について、会場となる「場地」の配置や儀礼作法について、数点について紹介をしておきたい。

(1) 「筲箕灣南安坊坊本家主辦第七十三屆盂蘭勝会」兼「潮州南安堂福利協進会第六十一屆盂蘭勝会」

8月12日に「筲箕湾南安坊坊本家主辦第七十三屆盂蘭勝會」兼「潮州南安堂福利協進會第六十一屆盂蘭勝會」の調査を行った。筲箕湾は香港では東区に位置する、現在では交通の要衝とされる地区である。もとは筲箕湾（米を洗って水を切るざるのような形状の湾）と呼ばれるような入り組んだ地形を利用した、漁港として多くの人が集まっていたという。そのため、かつては「蛋民」と呼ばれる水上労働者が多く生活する地域でもあったという。この愛秩序湾遊楽場で行われる盂蘭勝会は、『香港非物質文化遺産普查建議清單』によれば「本地伝統」に属するものとされているが、表題に「潮州南安



筲箕湾南安坊坊本家主辦第七十三屆盂蘭勝會見取り図

蘭坊福利協進會第六十一屆盂勝會」ともあるように、複数の盂蘭勝会を兼ねており、潮州的要素も融合しているものと見ることができる。

開催時間、運動場の舗装面の保護などに多くの制約があるという。調査日は、我々の到着が遅かったこともあるが、到着直後の23:00には潮劇を含めてすべての活動が終了した。これは、都市部の公園での開催ということから、近隣への騒音問題などへの配慮だという。この場地では、入口には言って左手に弁事処があり、並んで神棚（神袍棚と兼ねているようである）、経師棚の計3つの棚が並ぶ。その正面には神功戲棚があり、勧請された神や幽魂に演劇を披露するという構造になっている。その戲棚に向かって左側には附薦台が設置され、隣に大士殿が据えられる。このような空間の意味として

は、幡などによって招かれた（後述）入口から入った幽魂が、位牌が有るものは附薦台へいき、そうでないものも場地内にあり経を聞き、施食を受ける、と考えられている。様々な幽魂が場地内に集まるので、餓鬼王がそれを正面から見張っているという。供養する信者も、入口から弁事処を経て中に入り、持つものから持たざる者へ救済のための品が渡され、ともに内部で供養を受け、勧請された神々とともに演劇の供養をうけて帰るという流れになる、とのことである。

ここでは、以上のような配置で儀礼が行われるが、このうちの幾つかの点について気づいたことを記しておきたい。

a) 大士殿と面然大士、観音菩薩

大士殿とは、面然大士（面然餓鬼、餓鬼王）を祭る殿である。無数の幽魂が集まる盂蘭勝会の場の統制を取るために餓鬼王が祀られるとの説明を受けた。前節にも述べたように、面然大士は本来の盂蘭盆の儀礼にはかわりがないもので、『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』などの唐代の施餓鬼を由来とすることは言うまでもない。香港の大士殿が、しばしば場の全体が見渡せる位置におかれるのはその為だという。

また香港の大士（面然大士）も、他の地域に見られるように頭の上に観音菩薩が描写される。俗信では面然大士が観音菩薩の化身であると考えられているためである。

この俗信の由来となったのは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』などに見られる観音菩薩の化身する諸相に「應以天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等身得度者、即皆現之而為說法」のような相が記されること⁷、さらには実叉難陀訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』、不空訳『施餓鬼飲食及水法』にある諸餓鬼を救う陀羅尼を観音菩薩が授けたという記述であろう。

ちなみにこの『仏説救面然餓鬼陀羅尼真呪経』の内容を概略すれば、以下のような内容である。

世尊が迦毘羅城で諸菩薩、諸比丘、諸衆生にその夜、三更を過ぎたころ、法を説いていたとき、仏弟子の阿難は清浄な場所を探して瞑想をしていた。面然と名乗る餓鬼が阿難の前に現れ、「三日の後に、汝の命は尽



坪洲島の面然大士(頭の上には観音像)

油麻地四方街旺角区の面然大士

きて餓鬼の中に生まれるであろう。」と言った。阿難は心から恐ろしくな
って餓鬼に尋ねて言った。「私のそのような禍はどうしたら免れることが
できるのか。」餓鬼は阿難に答えて言った。「汝は早朝に若し能く布施百
千那由他恒河沙数の餓鬼と、百千婆羅門及び仙人等に一斗の飲食を施し、
また私の為に三宝を供養できれば、汝の寿命はまして餓鬼の苦し身を離
れ、天上に生まれることができよう。」と言った。

阿難がこの面然餓鬼を見ると、その身はやせ細り、枯れたように醜く、
顔には火が燃え上がり、喉は針のように細く、頭髮は乱れ、毛や爪は長
く鋭く、身は重しを乗せたように重々しく、またこのような不吉な話を
する様子は、それは恐ろしく、身の毛もよだつようであった。

即座に座を起き上がると仏のところに飛んでゆき、五体投地して仏足
を頂礼し、身心戦慄して仏に申し述べて言った。「助けてください！世尊
よ！助けてください！あと三日で私の命が尽きることになりました。昨
夜、面然餓鬼というものに会って、私に『汝は三日後に命が尽きて餓鬼
として生まれるであろう』と言うのです。私はすぐに聞きました『どの
ようにしたらそのような苦を免れることができるでしょうか？』と。餓
鬼が答えて言うには、『汝が若し施於百千那由他恒河沙数の餓鬼、及び百
千婆羅門、諸仙等に飲食を与えることができれば、汝は寿命を伸ばすこ

とができよう。』と。世尊よ！私はどのようにしたらこの苦を逃れることができるでしょうか？」

その時、世尊は阿難に告げて言った。「何も恐れることはない！良い方法が有り、汝にそのような餓鬼、諸婆羅門及び諸仙等に食を施させることができる。何も心配することはない。」

仏は阿難に告げて言った。『一切徳光無量威力』という陀羅尼がある。もしこの陀羅尼を誦せば、無数の餓鬼に施すことができ、また六十八俱胝那由他百千婆羅門並びに諸仙等の前に、各有摩伽陀斗四斛九斗の飲食を用意することができる。」と

仏は阿難に告げて言った。「私が前世でかつて婆羅門をしていた時、観世音菩薩及び世間自在徳力如来の所でこの陀羅尼を受けた。私はまさにこの陀羅尼の力によって、無量無数の餓鬼及び婆羅門、諸仙等の食を施すのに足り、私が施諸餓鬼に食を施したことによって、この身を離れ天上に生まれることを得たのだと思う。阿難よ！汝は今この陀羅尼を受けて、まさに自らその身を守れよ。」

その呪は以下のようなものである。

「那麼 薩縛 怛他揭多 縛路枳帝 三跋囉 三跋囉 虎吽」……

以上のように、この中には面然が観音菩薩の化身と言う直接的な描写が出てくるわけではなく、また陀羅尼を受けたのも「観世音菩薩および世間徳力如来の所」として観世音菩薩から陀羅尼を受けたと明確に言っているわけではない。このように見ると、後代のような理解はやはり俗信の中で徐々に生まれたものと考えべきであろう。そして、明代の『性善悪論』巻第四に「観世音菩薩化面然餓鬼縁」の一文が記されるように、このころまでにはその俗信が定着したのであろう。ただ、この「観世音菩薩化面然餓鬼縁」でも、題名では明確に化身の関係であることを言いながら、内容は実又難陀訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼真呪経』（宋宗暁『施食通覧』にも同様の文あり）を引くのみでその根拠には触れず、具体的に化身のことについて述べているのは題名の部分のみであることには注目しておかなければならない。

また、香港で餓鬼王が幽魂の統制を取るというのもたいへん面白い考えである。こうした発想は、実は古くから見られるものである。

そもそも、中国の邪鬼、邪神が悪さをすると病気になったり災厄が起きたりするという考えは、古くから信じられてきた。『春秋左氏伝』「昭公七年」でも以下のように言っている。

子産晋に適くに及び、趙景子問ひて曰く、「伯有、猶ほ能く鬼と為らんか。」
子産の曰く、「能くす。人の生始め化するを魄と曰ふ。既に魄を生じ、陽たるを魂と曰ふ。物を用ひて精多ければ、則ち魂魄強く、是を以て精爽にして、神明に至る有り。匹夫、匹婦も強死すれば、其の魂魄は猶ほ能く人に馮依し、以て淫厲を為す。況んや良霄をや。

つまり、「強死」した「匹夫、匹婦」の魂魄は「人に馮依し、以て淫厲を為す」と考えられたわけである。これが、道教に入り中元節へと発展させるものとなったものと考え方で、同時に仏教でもこうしたことが論じられるようになっていったようである。例えば、『法苑珠林』巻第六「六道篇四之二鬼神部」の六朝宋の「司馬文宣」には以下のようにある。

鬼云く、「昔の世に嘗て尊貴の爲めに以て衆惡を犯し、報を受けて未だ果の此の鬼身は竟きず。去ること寅の年に四百部の鬼有りて、大いに疾癘を行い、應ずる所の鍾災は、道人は忤はざるも、而るに横を犯し衆を極し多く福善を濫す。故に我を以て來りて之を監察せしむるなり」と⁸。

ここで語る者は、輪廻によって鬼の姿となり、「報いを受けて」、「此の鬼身は竟きず」と言いつつも、「四百部の鬼」が「大いに疾癘を行」うのを派遣され「監察」するという話があり、後に言う餓鬼王面然との類似性が見られるのである。

b) 招魂と幡、竹

大士殿には灯籠があり、中には人型の人形が置かれるのが印象的である。香港ではこれを灯籠ではなく、「幡」、「幢幡」としているのが極めて特徴的である。

「幡」、「幢」とは、「蓋」などとともにも仏の威徳を莊嚴するため道具で、とくに「幡」、「幢」は「はた」を意味する。興味深いことは、これらが古来、招魂をするためにも用いられることである。つまり、香港の灯籠型の「幡」の中に置かれた人形は依りついた神を表していることになる。

招魂と言えば、中国古代では『楚辞』「招魂」が有名であるが、ここでは幡

などを用いた記録はなく、死者の衣服を用いたものである。これに対して、インドでは古くから幡による招魂が行われていた可能性がある。

例えば、『長阿含経』には、有名な悉達太子の四門出遊場面で以下の様な記載が有る。

又異る時に於いて、太子復た御者に勅して嚴駕にて出遊す。其の中に於いて路に一死人の、雑色の繪幡もて前後に導引し、宗族親里の悲号哭泣し、之を送りて城を出づるに逢ふ。太子復た問ふ、『此れ何をか為す人なり』と。答へて曰く、『此れは是れ死人なり』と。問ねて曰く、『何如なるか死と為すとは』答へて曰く：『死とは、盡きるなり。風先んじ火は次にし、諸根は壊敗し、異趣に存亡して、室家は離別す。故に之を死と謂ふ』と。太子又御者に問ふ、『吾も亦た当に爾うして、此の患を免れざるべけんや』と。答へて曰く、『然り。生ずれば必ず死有り、貴賤有ることなし。』是に於いて、太子悵然として悦ばず、即ち御者に告げて車を廻して宮に還り、静黙して思惟し、『此の死苦を念はん。吾れも亦た当に然るべし』と」⁹

ここでは、葬列の先頭を、幡を持って先導する状況が描写されている。この様子は、今日の中国の伝統的葬列にも共通するものである。また同様の死者を祀る際に幡が用いられているとすること、『大般涅槃経』の釈尊の金棺前の描写にもある¹⁰。こうした記載は、みな漢訳された經典中の記載なので、インドでの状況を正確に表すものか、中国の情景を交えて翻訳したものかは不明だが、これが、唐代頃までには、招魂の為に幡が用いられている状況が描写される記録が見られるようになる。

『法苑珠林』「送終篇第九十七遣送部二」には葬儀の招魂に際して以下のようになっている。

問いて曰く、『何ぞ須らく幡上の其の姓名を書くべきや』。答えて曰く、『幡もて招魂するに、其の乾地に置き、魂を以て其の名を識らしめ、名を尋ね闍室に入り、亦たこれを魄に投ず。』と。¹¹

この記載は、幡によって魂を死者のもとに呼び寄せ、可能であれば生き返らせようとする唐代の招魂の儀礼についてのものである。ここで、幡に名前を書いて招魂を行うという、後代の習俗にもつながる儀礼が唐代に既に行わ

れていたことがわかるのである。

また、香港の幡に話を戻すと、幡の上には竹があるが、これも同様の宗教的意味があると言われている。また、林錦源氏の説明では、ほかの地域で柳を置くのとも同じで、竹の多い南方で同じ招魂の意味を込めて使用するという。同様の形式の灯籠は大士殿の前ばかりではなく場地上につながる街頭にも点々と見られることがある。香港ではこれらも同様に幡と称され、外から魂を場地上に導く意味があると言われている。日本における紙垂と竹とよく似た習俗な訳だが、なぜ香港では灯籠が使われるようになったかは不詳である。

ここに一言付しておけば、青竹、柳葉をこのような招魂に関わる儀礼に使うことは、仏教文献では唐初期の頃の密教文献『陀羅尼集経』『軍荼利金剛救病法壇』に見られている。

若し人の鬼神病の著く者有らば、病人の家に於ひて、法の如く道場を莊嚴せよ。畢已れば、即ち施主は上好の衣服を著けよ。四肘二色の彩壇の、一は白にして二は赤とするを興作れ。壇は四門を開き、五方には各それ畫二跋を折りて羅らべ(十字に交差させよ)、其の壇の四角に各それ長刀一口を豎て、四門には各それ好き箭の一隻を豎て、中心には鏡一面の仰ぎ著くを安じ、種種の飲食十盤を、四面に四盤、四角に四盤、中心一盤、壇外一盤を共に成り、一切の鬼神に燈十二盞、香水娑羅一を施し與へよ。壇外の西南に、別に泥にて一所小圓の壇子(を設け)、一盤の食を著し、一盞の燈を安じ、一切の鬼神に與へよ。大壇の中心には一水罐を著き、満ちみちと浄水を成り、青柏葉、青竹、柳葉の生絹を以て束ねるを其の罐口に挿せ。三日の内に限り、壇に於いて誦す前に大呪す。病人を差せば(これを)限りと為て即ち止むべし。唯だ安悉香を焼け。若し呪、誦をなさざれば病人は房に還り、若し呪、誦をなす時は還りて壇内に入れ。呪師、病人は俱に一切の酒肉、五辛を断ち、若し其れ食する者は作法は成らず。若し法の如くせず浄潔せざる者は、呪師と病人の二人は俱に毘那夜迦鬼王打たれ、辟除すること能はず、元來作法を為さざるに如かず。一切所有の香華、香水、飲食等物、皆な七遍呪し、壇中に用ふる所の一切の物等、皆な亦た是の如く七遍呪し、已れば然る後に入用す。若し是の如くして作法せば即ち成るなり¹²



油藤地旺角区四方街坊孟蘭勝会大士
台(上方に竹あり)



坪洲島路上の「幡」と竹

ここでは青竹、柳葉とともに吉祥樹としての青柏葉を浄水の水がめに生絹でまとめて挿して用いているところは、中国的儀礼との融合が見られるところである。また、壇上に刃物、鏡をおくのもまた然りである。

ちなみに、この修法は、軍荼利金剛が病を起す鬼神を降伏するという考えから「軍荼利金剛救病法壇」という名がつく修法となったものと見られるのであるが、一切の鬼神に食や燈を施して避邪するという行為が後の時代の施餓鬼によく似ていることがわかる。

このように様々な資料を見てくると、古代からの様々な信仰が、何らかの類似性をもって混ざり合い、今日の信仰となっていることがわかる。こうしたフィールド調査を通じて、歴史資料を紐解いてみるのも新鮮な驚きがあるのではないかな。

なお、この『陀羅尼集経』にもみられる毘那夜迦鬼王は、インドの Vināyaka のことで、大自在天と烏摩の長子とされ、観音の化身とさもされる。先の面然大士の観音化身説も、あるいはこうしたところから俗信で混同されたのではないかな。また面然大士が主に青色描写されることも、あるいは軍荼利金剛との混同があった可能性も考えられる。こうしたことは単なる憶測に過ぎないことであるが、調査の際に思いついたことをここに備忘のために記載しておくこととした。

c) 神袍棚と焼街衣

「神袍棚」は、神明に神袍（官服の形式）を奉納するための棚で、通常は棚内に3着（地域によっては2着或いは4着）の大神袍を掛け、その周囲に小神袍を掛ける。棚内には神銭、神衣を供える。また棚の両脇には「金糸吊」を掛ける。3着の神袍は「天地父母」、「南辰北斗」、「諸位福神」に奉納されるとされ、その目的は神明に神袍を着替えてもらう為だという。水陸斎などに見る仏や神祇の「洗浴」の供養に似た考えによるものと推測されるが¹³、奉納する袍、衣服、鞋を置く専用の棚が用意されるのは珍しいように思う。衣服に対する特別な思いが有るものと思われるがその由来等については検討を続けたいと思う。

香港の儀礼の中で、こうした衣服に対する信仰的思いが強く現れているのが、場地とは別に、とくにこの期間に街で個別に行われる「焼街衣」である。

「焼街衣」とは、紙で作った衣を焼いて亡者「好兄弟（「鬼」の兄弟）」に供



神袍棚(写真は油麻地四方街)



神棚の中の神冠と神鞋

するという意味から称されるもので、もちろん、衣だけではなく食物、香、燭などで供養する。（『清單』（3.30.4）に拠れば「好兄弟」は潮州系の盂蘭盆にともない行われるとしている）。台湾にもこれと共通する風習があり、やはり「好兄弟」と称しているが、「焼街衣」という名称、「衣」を主とする点については台湾ではあまり聞かれず、衣服に重点が置かれるのはやはり香港の「好兄弟」の特徴と言えるようである。なお、この「焼街衣」においても、香を供養するのは亡者とその煙を食するためとの俗信からであるという。これも珍しい考え方であると林錦源氏は言う。

なお、この「焼街衣」は、戸口で火を用いるという行為として見れば、日本の「迎え火」や「送り火」と同じようであるが、香港で理解され伝えられている宗教的意味は、日本で各家の霊を迎えると理解されるのとは異なり、あくまでも街頭をさまよう幽魂に供するためと考えられている。各家の祖霊



焼街衣の情景(写真は坪洲島撮影)

に対する供養は別に行われ、家の中の祭壇、或いは盂蘭勝会「場地」の「附薦台」(後述)で行われるという。

焼街衣では、子供の為にピーナッツを供えることもあるという。硬貨など現金を供える場合もあるが、香港では子供のころからこうした供物を拾ってはならないと教わるという。

(2) 油麻地四方街旺角区の「油蔴地旺角区四方街街坊第五十届盂蘭勝会」

8月16日(農曆7月14日)12:00にオースティン駅で林錦源氏と待ち合わせ、油蔴地四方街旺角区の盂蘭勝会の調査を行った。待ち合わせの駅周辺では大陸からと見られる多くの労働者が多いので何か大きな工事があるのかと聞くと、大陸、遠く是北京へと続く「高铁(中国の高速鉄道)」の駅の建設が行われているという。

「場地」に関しては、筲箕湾でもそうだったように、香港の「盂蘭勝会」は公の公園や運動場に場をを設置して行われている。公園などの保全の為に政府の制約も多く、運動場を壊さないように養生に工夫が凝らされているという。筲箕湾で、夜23:00以降には騒音規制が有るとの説明を受けたように、規制が厳しいとのことである。

場地に入ると、どこでもそうだが、地域の人々を中心（外部者も可）に「自発」（自発的な布施）の供物が集められるのに気付く。また、ここでは派米（平安米）だけではなく、バケツ、鍋などの日用品が供えられているのが興味深かった。儀礼が終われば、老人など生活上必要な人に配られるという。地元民に聞いたところ40年も前から同じようだったという。

なお、油麻地四方街旺角区の盂蘭会では「盂蘭会」ではなく「盂蘭盆」と称していることもあり、他とは違う流伝系統ではないかとの指摘があった。他にも多く他の「場地」との違いが見えていた。ただ、その理由は不明である。

特徴的という点では、豚の頭や鶏に似せて作った供物や「糖塔」にも特徴がみられる。それらについては林錦源氏 *The Hong Kong Chaozhou Community's Food and Offerings at Yu Lan Festival: The Case of Woo Kee Loong(Kwai Yue) Cake Shop*, International Conference on Foodways and Heritage, Conference Proceedings(2013) に詳細に記されている通りである。ここの供物は林錦源氏の論文の共著者の店で作られたものとのことである。



糖塔



点心で作った鶏、魚などの供

ここでは潮州の訪問劇団が呼ばれて来ていた。彼らは舞台下に住んでいるという。潮州から劇団を呼ぶ理由を尋ねたところ、香港で演劇の専門家が減っているのが原因とのことである。香港では主流の広東語に対して潮州語を使う「潮劇（潮州地域の地方劇）」では、香港市内、とくに市区では流行しにくいため、自然香港では潮州劇の担い手が減り、潮州から劇団を呼ぶことになっているという。香港での伝承が途絶えて、他地域の助けをすでに借りてい

ることから、香港独自の非物質文化遺産の登録は難しくなっているとの説明も受けた。

潮州の劇団員らによって、伝統的に行われてきた舞台設置に関わる祭白虎、破台の儀礼が行われたかや、潮州戲の舞台裏に華光先師が祀られているか、など伝統儀礼に関して質問したところ、祭白虎、破台はすでに行われたとのことであった。しかし、舞台裏で神は祀られているが、「神」であって、「華光先師」という名では呼んでいない、名前も書かれていない、とのことである。劇団員の誰に聞いても知らないとのことであった。なかを見学したところ、舞台裏の鏡の間、神棚がおかれ、何らかの神が祀られていることは確認できた。他で見られる華光先師とはやはり少し違うようであった。



舞台裏の祭壇（松尾恒一氏撮影）



油蔴地旺角区四方街街坊第五十屆盂蘭勝會

最後に、「戲台（舞台）」や棚を作る職人について質問したところ、専門の「搭棚師傅」が香港にまだ4、5人おり、専門の倉庫で棚の材料を保管しているとのことであった。

(3) 坪洲孟蘭勝会の「場地」と儀礼

8月14日（農曆7月12日）、坪洲島の孟蘭勝会の調査を開始した。坪洲島は香港西南部に浮かぶ0.99平方キロの小島である。ランタオ島の南、ちょうど香港ディズニーランドを眺望できる場所に位置している。島嶼部とはいえ、香港埠頭から高速船で30分くらいの通勤圏内で、ラッシュアワーには高速船も通勤客で埋まる。四周の海からは石灰の原料が豊富に取れ、石灰業が盛んだったほか、1937年には当時としては最大級のマッチ工場、大中国火柴廠が創業されている。

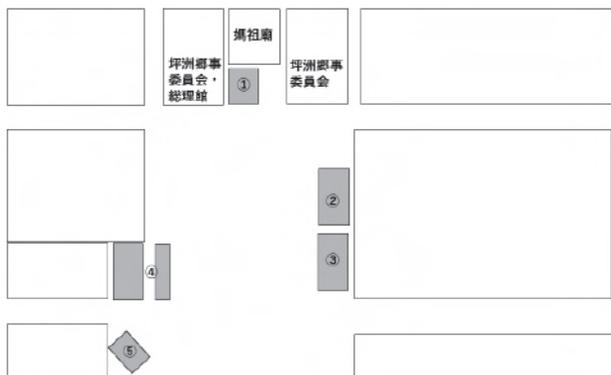
坪洲島では、『清單』では「海陸豊/鶴佬伝統」に属する孟蘭勝会（毎年農曆七月十二至十六日、『清單』3.30.3.3）と「本地伝統」に属する街坊建醮（農曆七月十九至二十三日、『清單』3.30.2.12）が行われているとされる。このうちの孟蘭勝会は中元建醮協理會が主催しているが、毎年天后（媽祖）が正副総理を決める形式になっており、特定の組織がないのが特徴的である。行われる儀礼には「破土」、「請神」、「開壇建醮」、「行朝」、「誦經」、「走午朝」、「走龍船」、「放生」、「祭幽」等がある。本地伝統では、「開壇」、「行朝」、「禱行郷」、「祭小幽」、「遊水陸」、「祭大幽」等の儀礼が有り、21日には「禱行郷」という天后が坪洲島を巡遊する行事が有り、「洪文建醮」とも呼ばれている。今回我々が参拝したのはこれらのうちの前者、「海陸豊/鶴佬伝統」の孟蘭勝会である。

これは主に海陸豊（現在の汕頭に属する海豊県、陸豊県を跨ぐ区域）出身の香港人による儀礼で、他の地域から伝わった孟蘭会とは若干異なるとの説明を受けた。同じ香港内でありながら、移民の歴史とともに各地域の文化が重層的に伝えられ融合している香港の儀礼の複雑さを感じた。

実際に参拝しても、坪洲島の儀礼では、媽祖、観音信仰とのつながりを強く感じさせられる。上にもみたように、「海陸豊/鶴佬伝統」の孟蘭勝会でも正副総理の決定には天后の意思が働くとされ、また「洪文建醮」でも媽祖の巡遊が有ると言い、他にも坪洲島では毎年農曆5月下旬に戲班を招請して5夜に

亘って神功戯を上演し、天后誕を祝っているという（『清單』3.18.13）。実見した感じからも、例えば面然大士が主尊のように中央に据えられ、後ろに媽祖廟がある、面然の開眼が三官大帝よりも先に行われる、「誦経」が媽祖廟で行われるなど、媽祖への儀礼が重要な位置を占めているように見えるのである。

一番奥の正面は面然大士が安置される①の大神台となる。開壇前には大士



坪洲島孟蘭勝会见取り図



②「附薦台」、③「神棚」に相当する棚

ほかの場所で制作の途中で、開眼儀礼の前に移動され安置されるとのことである。儀礼開始前は黒い馬が置かれるのみである。潮州式では大土王の馬は赤馬が一般で、「供文」を天に届ける役を務める。坪洲島では、赤馬は③の棚に別に用意され、初日の最後に「疏文」を天に届けるために「化」（火で焼く作法）される。



②「附薦台」



①大土棚内、奥は黒馬



④「経師棚」に相当する棚



組み立て中の大土

②は附薦台である。総理館で一定の金額を払うと（この時は450香港ドル）「龍牌」（位牌）を用意してくれる。期間中には香と経により供養してもらえ、法要終了後には「化」す。なお、香港では初盆に親族が場地の附薦台に位牌を建てて供養するという意識はないようで、家族でも、友人でも、またいつ

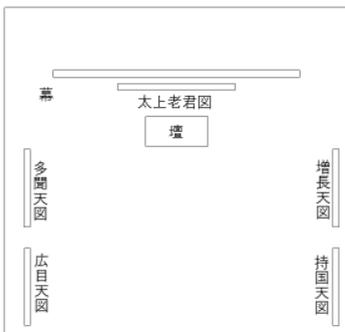
亡くなった方でも供養できるという。

③、④、⑤の棚には特に名称はないとの説明であった。③の棚には天官、地官、水官の三官大帝が祀られ、向かって左の脇侍は五穀王、右の脇侍は城



③の棚、中央は三官大帝

奥は赤馬、中央は鬼才2体



島内各地から勧請された神々が安置される壇

④棚見取り図

障で、下段には左右それぞれに鶴と馬、そして鬼才が2体ずつ祀られている。馬と鶴は、それぞれ初日と二日目の晩に「疏文」を天に届けるために、疏文とともに「化」される。

④は、経師棚に相当するものと見られ、儀礼の多くはここで行われる。正面には太上老君が祀られ、左右には四天王の図がかけられている。太上老君の前の壇上には五方神の図が安置される。また外の壇には、「請神」の儀礼を経て、島内のほかの廟の神々（神像など）が招かれ、安置される。



④の棚内部壇上の五方神



④島内の神々が安置される壇(勧請前)

a) 「開壇」

坪洲島では時間をかけて儀礼の調査も行うことができたので、見聞できた儀礼作法について以下に記録しておくことにする。

13:00 過ぎから④の棚で儀式が始まった。初めに行われるのは、開壇の儀式で、総理の焼香、礼拝の後に、一人の道士があらわれ、結界を張り「開壇」つまり壇を開くための儀式を行う。

そこで行われる具体的な作法としては、火をつけた符を刺した七星剣を五方に突き立て、次に血を出した鶏の頭部で五方の空中に符を書き、つぎに壇の五方に白米を供え、米を撒き、火をつけた松明を振るい地にたたきつける、というものである。

なお、鶏の血は、動物愛護の為という観点から、剣で刺して血を出すとい



「開壇」儀礼-1
(松尾恒一氏撮影)



「開壇」儀礼-2
(松尾恒一氏撮影)

う行為は簡略化され、鶏も生きたままで行われていた、本来であれば、雄鶏の鶏冠を切った血で五方を清めるとの説明を受けた。

これらが終わると、道士が三人加わり、香盤、座具、幡（2名）を持って壇を一周して④の棚を離れる。

b) 「謝土」

開壇が終わると、道士4人は④の棚を出て、そこから場を右回りに「総理館」、「大土台」、「附薦台」、「三官棚」の順で巡り、海辺の謝土の儀礼を行う場所に向かう。

謝土は土地に感謝するための儀礼である。この場地では、13:20に「総理館」、「大土台」から見た正面の外側の海辺で謝土の儀礼が行われた。



謝土に向かう道士(松尾恒一氏撮影)



謝土(松尾恒一氏撮影)

c) 「請神」

13:45 ころに請神の儀式が始まる。これは主に坪島内の各廟の神々を迎えに行き、④の棚の前壇に安置し祀る儀礼である。

まず、仙姉廟に向かう。仙姉は七姐とも言い、七夕の物語の織女を言う。

香港では西貢と並んで坪洲島の仙姊廟が有名で、七姐誕に七姐衣を焼く風習が残されている。

始めに仙姊廟で3人の道士による請神の儀礼が行われ、順に周囲の廟を回り、順に神像が運びだされて場地上に戻った。



請神の儀礼

請神後の④棚の壇

d) 「開光、点睛」

18:00に、大士が場地上に運ばれ、大士台に迎えられると、開光、点睛儀礼が始まる。開光、点睛とは日本の開眼に相当する儀礼である。大士像は張り子形式で作られ、全身青色、5メートルほどの高さである。片足を挙げているところに特徴があると言い、かつては子供がこの足の下くぐる「飄色」という儀礼があったという。また、ここの儀礼の特徴的なところは、鏡を神像の目に照らし、鏡に朱を塗って点睛を行うという点だという。開光、点睛の儀礼は、大士、三官大帝の順で行われた。

開光、点睛の儀礼が一通り終わると、島民は灯籠を以て街を巡回し、場地上に戻ってから初日の疏文を馬とともに焼き、天上に届ける儀式がおこなわれる。これを以て、この日のすべての行事は終了する。

e) 「行朝」

8月15日(農曆7月13日)9:00から「行朝」が始まった。これは道冠、道服をつけた道士3人が全島の「大王爺」、「本洲社公」など、土地神を祀る祠を詣でる儀礼である。



場地へ出発する面然大士
(松尾恒一氏撮影)



場地向かう道中
(松尾恒一氏撮影)



点晴儀礼①大士殿



点晴儀礼②大士殿



点晴儀礼③三官殿



点晴儀礼④三官殿



行朝を行う道士



土地神①



土地神②



土地神③

f) 「誦経」(媽祖廟内)

行朝が終わると、媽祖廟の中で誦経が行われた。

g) 「恭迎聖駕」

8月16日(農曆7月14日)、20:00より、「恭迎聖駕」の儀式が行われた。ここでの「恭迎聖駕」とは、勸請の一種とされる。前日には面然大士と三官大帝、島内の諸神を勸請して、天に疏文を送っているが、察するに、ここでは道教の最高天(玉清境、上清境、太清境)に疏文を送り、三清(元始、靈宝、道德)を勸請するものと理解される。

坪洲島の盂蘭勝会では、この日の20:00に音楽が鳴り始め、儀礼が始まる。④の棚の前、神々の神像が安置された後ろ側に長い台が用意され、手前に壇、奥には黒い布を張った台が用意される。黒い布の上には大きく「恭迎

聖駕」の四字の形に米が盛られ、壇上の香台には3本の80センチほどの大きな香が立てられ、紙で作った鶴（鶴の背には緑衣の使いが乗る）が置かれて準備が整えられる。その間、音楽は続く。

用意が整うと、壇では焼香が行われ、5人の道士が道冠と道服をつけ、壇と「恭迎聖駕」の周りを幡を持って一周し、道士の作法が始まる。

壇前で道士一人が七星剣を持ち、壇前の3メートル四方程度の空間の四隅にステップを踏んだ後、四隅と正面に向かってそれぞれ剣先で宙に符を書き、



手前から、白鶴、「恭迎聖駕」の台

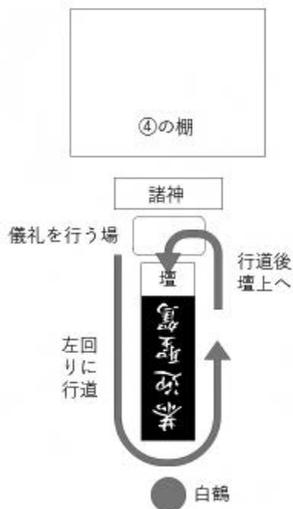
水を口に含んでしぶく。七星剣のあとは牌、続いて印に持ち替え、同様に宙に符を書き、またしぶきをあげる。

道士一人が白鶴の口に酒を含ませ、緑衣の使者に疏文をのせ、火をつけて「化」す。これによって疏文が最高天に届けられたことになる。

道士は壇の元に戻り、他の道士とともに幡を持ち、「化」されて燃える鶴と「恭迎聖駕」と書かれた台の周りを一周し、次にまた台の周りを一周する。その間に壇は移動されて台上に登る階段が置かれ、道士たちは壇の有った位置から台上に上り「恭迎聖駕」の字の上を踏み進んでいく。台上では奇声を発し始め、神々が憑依したことを表すものであろう。場地の雰囲気が一挙に高揚していく。

そのように台上を5人で踏み進んだ後、台の反対側に設置された階段から台を降り、左回りで上り階段に向かってまた台上に上り、同様に数周、踏み

進む。その間、奇声と音楽はしだいに大きくなる。その後、道士たちはその高揚した雰囲気のまま台から離れて場の周り、町の中を一周駆け回る。道士たちが台を離れると、周囲の参列者は争うように台上で踏みつけられた米を集め、持ち帰る。これでその日の一通りの儀礼が終了する。



「恭迎聖駕」儀礼見取り図



「恭迎聖駕」の壇に上る道士たち

坪洲島の孟蘭勝会は翌日にまで続き、「走龍船」、「放生」、「祭幽」等の儀礼が予定されていたが、我々は滞在時間の関係で今回は参拝できず、次回への宿題となった。

3. 孟蘭文化節

前章までに紹介してきた孟蘭勝会の他に、銅鑼湾ビクトリア公園で香港潮属社団総会主催の孟蘭文化節が行われることを聞き、参観することになった。先の分類でいえば「潮州人伝統」に属するものであるが、実際の孟蘭勝会の法会の場合そのものというよりも、伝統行事を紹介と言う意味合いがより濃厚なイベントととらえてよさそうである。

『文滙報』(8月13日)に紹介された潮属社団総会会長の陳幼南氏の挨拶によれば、「香港の潮州系移民の孟蘭勝会は、2011年に中国の国家非物質文化遺産に登録され、昨年総会によって觀塘で第一回目の孟蘭文化節が開催された。今年はビクトリア公園に場所を移して規模を拡大し、潮州文化を紹介することを目的として「搶孤競賽」、「親子盆供推疊賽(親子で供物をどれだけ積み上げられたかを競う競争)」、「孟蘭文化展示」、「孟蘭学堂(孟蘭盆文化講習)」、「孟蘭伝統懷旧美食(孟蘭盆時の伝統的食品)」などの活動を行う」としている。

潮州系の孟蘭勝会は、もともとは戦後の混乱と困窮の中で多く港湾労働者として働いていた潮州系の幫会を中心に、資金を集めて行われたことに始まると言われている。潮州系移民は今日では香港全人口700万人のうちの約120万人を占めるようになり、潮州系の孟蘭勝会も香港各地で行われるようになっていく。先の『香港非物質文化遺産普查建議清單』にあげられているものだけでも30箇所以上になっている。開催回数の多い、つまり古くから開催されているところでは、例えば先にも言う筲箕湾「潮州南安堂福利協進會第六十一屆孟蘭勝会」、「油蔴地旺角区四方街坊第五十屆孟蘭勝会」などに見られるように、2016年までに50年から60年も行われてきたことがわかる。

潮属社団総会としては、そうした潮州系の孟蘭勝会を、組織として「文化祭」として開催し、潮州人系香港人の子孫が故郷の文化を忘れないように、

様々な習俗を紹介する場という意味も含まれているという。

会場では運営委員会の委員である胡炎松氏を紹介され案内をお願いした。映画制作会社の董事（Director）をされている氏は、こうした文化節の推進にも様々な貢献されているという。

12日19:00からはセミナーが有り、潮州で有名な木偶戲芸人の陳錦濤氏の講演が行われ、100年前から使われる木偶を使用しつつ伝統木偶戲の紹介があった。陳錦濤氏は長州で行われる吉澳村天后宮第二十六届安龍太平清醮も主理として儀礼を執り行うとのことである¹⁴。林錦源氏によれば、この長州の太平清醮は、本年は2016年10月1日から5日までおこなわれ、より古式の儀礼を残しており、香港文化博物館でも今年は撮影に行くという。記録映画の完成が待たれるところである。

なお、孟蘭文化展示では、実際の孟蘭勝会の「神袍」の実物などのほか、



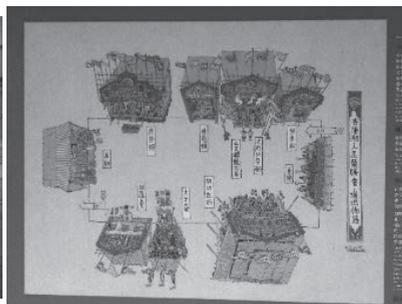
ビクトリア公園2016孟蘭盆文化節入口



孟蘭盆文化節メインステージ



伝統食品パネル展示



香港潮人孟蘭勝會場地佈局図

パネルなどによって、潮州の盂蘭会ばかりではなく、同地域に関する行事、伝統食品などが紹介されていた。

まとめ

今回の調査旅行では、日程の関係で坪洲島の盂蘭勝会を最後まで参拝することはできなかったが、香港各地で行われている盂蘭盆の場や儀礼及びその変化に関する情報を多く入手でき、今後の研究の上で重要な示唆を与えてくれたと思う。

香港は、長年中国の政治行政とは一定の距離があり、中国中心からの規範化の干渉も比較的緩やかだったと言える。そのため広く文化的に言えば中国文化の中心から離れた周縁にあると言え、その分、中国文化の古層を残しつつ、また同時に土地の民俗信仰と習俗をむしろ強く残してきた。靈魂観から言えば遊魂、孤魂に対して盂蘭盆や中元節を行うことは中国全体の文化とも一致するが、今回の調査に見るような衣服や灯籠に魂を見る観念は古来南方の文化を伝承しつつ香港での「神袍」や香港にいわゆる「幡」のように強く現れている。こうしたことは、伝承という角度から見て大変興味深いことである。とくに、筆者は9、10世紀敦煌や13世紀頃までの大足石刻、安岳の研究を遂行していることもあり、中国文化の中心と周縁での祭祀儀礼を考える場合に参考になる視点を得ることができた。古くからある習俗の起源やその発展の歴史的背景ばかりではなく、その後の周縁地域での独特の変容を見ることが重要という意味合いで、本稿でも、現状を紹介しつつ、「観音と大土」、「幡と竹」などに紙幅を割いた次第である。

なお、今回の調査でもう一方で重要性を感じたことは、中国文化の中心に対して地方の独自文化を創出しようという意識が周縁地域ではしばしば出現するという視点である。香港を例に改めてこれを考えるに、中国への返還を経て以降、香港を中心とする文化の創出が強く提唱されるようになってきているのは間違いない。そのために政治的、文化的にも大変な苦勞が払われていることはここ数年の状況より見ても明らかで、香港文化博物館の設立と運営もそうした動きと微妙に連動するもののように見える¹⁵。ただ、もともと香港の文化はと言えば、実際にはエスニックグループを含む近隣各地域からの移

住民のもたらす無数の文化の集合体であり、それぞれが中国文化の枝葉の部分を含みつつ独自の習俗を継承しているのが実態である。もちろん今回の調査でも見てきたように、枝葉の枝にあたる部分の類似性によって地域のグループが作られ、また根幹にある幹の部分の共通性からさらに別のグループとの融合も進む方向にはある。しかし、一方で起こるジレンマとしては、中国文化に対する地域文化として、何が枝になり幹になりうるのか、また何者がイニシアチブを取り、他のグループと如何に整合性を取り協調するかということであろう。

このように考えた時、同様の問題が東アジア社会の中ではしばしば起こっていることに気付くのではないか。筆者の研究から見れば、10世紀の唐王朝の分裂から解体の時期には、周縁地域でもそれぞれ新たなイデオロギーが模索されるようになり、敦煌においても漢民族と周辺諸民族の信仰の共通項から金山信仰という一種の山岳信仰が選択され、同地域の民族が共存する独立文化を模索した経験がある。敦煌という地域のこうした経験も、類する歴史的事実といえようか。

¹ 本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)「9、10世紀敦煌仏教、道教、民間信仰融合資料の総合的研究(16H03404)」に基づく研究成果の一部である。

² 東京大学出版会、1981年。

³ この清單(リスト)に関して香港文化博物館では以下のように説明している。

国際連合教育科学文化機関の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)によれば、各締約国は、地域や団体と関係する非政府組織の参与の下で、区域内の各種の非物質文化遺産の項目を確認あるいは確定して非物質文化遺産の清單を作成し、保護の基礎としなければならないとある。2006年に『公約』発効後、政府は香港における非物質文化遺産の広域調査を計画し、集めたデータを以て香港初の非物質文化遺産リストとしようとした。政府は2008年に非物質文化遺産諮詢委員会(非遺諮委会)を成立させ、香港の非物質文化遺産広域調査を指導し、また2009年8月には香港科技大学華南

研究センター（研究センター）に香港非物質文化遺産広域調査を行うよう委嘱した。三年あまりの時間を経て、すべての広域調査作業は2013年中には完成した。研究センターは800個にも近い非物質文化遺産についてそれぞれ広範な研究と実地考察を行った。非遺諮委会は根據研究センターの提出した調査結果にもとづき深く検討した結果、477個の主及び候補からなる香港非物質文化遺産建議清單を推薦した。社会各界の建議清單に対する意見を集めるために、政府は2013年7月10日から11月9日までの間に、四か月の公聴会を行った。その期間には、政府十八区の区議会と郷議局の意見を受けた外に、さらに多くの市民と団体の提出した書面意見を受け取った。非遺諮委会はこの公聴会の意見を参考とした後、建議清單項目を477個から480個にまで増やし、このリストが最後に政府の確認を経て、2014年6月に香港初めて非物質文化遺産清單として公布された。

参照 http://hk.heritage.museum/zh_TW/web/hm/cultural/inventory.html

- 4 『明版嘉興大藏經』第10巻、新文豊出版、22頁b。
- 5 孟蘭盆と施餓鬼の歴史に関しては以下の拙稿を参照。「中国仏教と祖先祭祀」、『儒教・仏教・道教儀礼の交流と展開』、勉誠出版社、2017年近刊。
- 6 王権と儒仏道三教との関わりについては以下の拙稿を参照。「敦煌仏教の展開と日本」、『日本宗教史』、吉川弘文館、2017年近刊。
- 7 このうちの夜叉は鬼神でありまた森林にすむ精霊と理解されることから餓鬼王と混同されたか、或いは夜叉、羅刹にも化身することから餓鬼王に化身することを推測したものであろう。ちなみに、一般に観音菩薩は「三十三身」つまり三十三に変化するとされるのは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「観世音菩薩普門品」によるものとされが、実際の『妙法蓮華経』には三十三という数は記されず、以下のように三十一身が記されているのみである。

佛告無盡意菩薩：「善男子！若有国土眾生，應以佛身得度者，觀世音菩薩即現①佛身而為說法；應以辟支佛身得度者，即現②辟支佛身而為說法；應以聲聞身得度者，即現③聲聞身而為說法；應以梵王身得度者，即現④梵王身而為說法；應以帝釋身得度者，即現⑤帝釋身而為說法；應以自在天身得度者，即現⑥自在天身而為說法；應以大自在天身得度者，即現⑦大自在天身而為說法；應以天大將軍身得度者，即現⑧天大將軍身而為說法；應以毘沙門身得度者，即現⑨毘沙門身而為說法；應以小王身得度者，即現⑩小王身而為說法；應以長者身得度者，即現⑪長者身而為說法；應以居士身得度者，即現⑫居士身而為說法；應以宰官身得度者，即現⑬宰官身而為說法；應以婆羅門身得度者，即現⑭婆羅門身而為說法；應以比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷身得度者，即現⑮比丘、⑯比丘尼、

⑰優婆塞、⑱優婆夷身而為說法；應以長者、居士、宰官、婆羅門婦女身得度者，即現⑲婦女身而為說法；應以童男、童女身得度者，即現⑳童男、㉑童女身而為說法；應以㉒天、㉓龍、㉔夜叉、㉕乾闥婆、㉖阿修羅、㉗迦樓羅、㉘緊那羅、㉙摩睺羅伽、㉚人非人等身得度者，即皆現之而為說法；應以執金剛身得度者，即現㉛執金剛身而為說法。

なお、竺法護訳とされる『正法華経』では、具体的な変化の身に関する記述はさらに少なく簡略的な記述にとどまる。

三十三身と言うのはインドで好まれる三十三という数字に合わせて後に言われるようになったもので、『長阿含経』などには「梵童子」が三十三身に化身する神通力を記している。観音菩薩三十三身説としては、現存の文献としては隋代の天台智顛『観音義疏』、『観音玄義』頃が古い例となろう。少なくとも鳩摩羅什の時代には三十三身という理解ではなかった可能性が高い。

8 『大正新修大蔵経』第53巻、314頁b。

9 『長阿含経』巻第一、『大正新修大蔵経』第一巻、6頁c。

10 『大般涅槃経』巻第二、『大正新修大蔵経』第1巻、199頁c。

11 『大正新修大蔵経』第53巻、999頁b。

12 『大正新修大蔵経』第18巻、857頁下段。

13 拙稿「温室経講経と俗講、唱導」、『出土文献研究視野と方法』第五輯、国立政治大学中国文学系編印、217-244頁、2014年。荒見泰史、桂弘共著、「韓国東海三和寺水陸齋調研報告」、『中国俗文化研究』第11輯、巴蜀書社、129-142頁、2016年。

14 『清單』によれば、長洲の太平清醮は毎年5日間行われるもので、「接神」、「開光」、「走午朝」、「水祭」、「走船」、「会景巡遊」、「祭幽」、「謝天地」、「搶包山」、「分發幽包」と「送神」等の儀式活動が行われるほか、「神功戲」（まず粵劇を演じ、その後で白字戯を演じるもの）が演じられるという。また長洲太平清醮は、2011年に「第三批国家級非物質文化遺産名録」に列せられたという。（『清單』3.42.8）

15 香港文化博物館は九龍の郊外、新界の沙田にある、香港返還後に建てられた新しい博物館である。文字通り香港文化というコンセプトで各種の常設展示、特別展示が行われている。